

## 古きよき時代の水郷土浦

保 立 俊 一

謡曲の「桜川」で名高い磯部の郷の近くに源を発し、悠々と関東平野を流れ下つて霞ヶ浦に入つて居る桜川は幾世紀の間に其の流れを変えつつ現在に至つて居ります。土浦の現在の桜川の河線は今から約五四〇年前、当時の土浦城主今泉三郎によつて三年かけて掘割されたものと聞いております。

旧桜川は、虫掛から田中八幡神社前―二高前―警察署横―鷹匠町―亀城タクシ―横―関東銀行前―川口祇園町―霞ヶ浦という流れでありました。私達の子供の頃は、この町の中央を流れていた川の方に懐しい思い出がいっぱいあるわけで、現在の桜川の方へは年に何回かしか行きますませんでした。『水郷』という言う言葉がびつたりする町並みだったので。家のすぐ前が川だったので、子供の頃から舟に乘つたり、釣をしたり、川での思い出は常に鮮明で残つております。

春。タナゴが赤と紫の色に変色します。オカメタナゴと呼んでおりました。二五位の高さの石垣の川岸から釣糸をたれて魚釣りをしたのですが、今の釣竿のようなものはありません。唯の篠竹の先に木綿の縫い糸をつけ先に釣り針をつけただけのもので、川岸からそつと釣糸をたれます。川岸の家々から流れ落ちる下水口の下川底に魚の群れているのがよく見えます。タナゴの赤や紫の色も鮮やかに見えます。

子供達は、つり針の先にゴハン粒を半分にしたのをさして魚の口の前へたらし、魚がくいつくのを見つめており、魚がえさを食べるのを見て釣り上げるといふ簡単で確実な視覚による釣をしていました。川の水がそれほど澄んでいたのです。川面から三、四十センチ位までははっきり見え、色色の魚や川虫の泳ぐ様子が手に取るように見えました。水泳をおぼえたのも前の川で、今の祇園町のセントラル劇場付近に農商銀行というのがあり、倉庫へ米を荷上げする為、川の中につき出しがありました。『カン』とよんで居りましたが、其のカンの上に着物を